

言葉との邂逅

飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ

井村和清著 祥伝社

小石までが輝いて見えるのです

自分の命は、もう長くない。

そのことを知ったとき、人は、どのような思いに駆られるのか。

それは、おそらく、実際にそれを経験した人間にしか分からない。

経験のない人間に想像できるのは、刻々近づいてくる死への恐怖に駆られ、肉親と別れることへの悲しみに沈み、自分を襲った不幸を嘆き、絶望と混乱の中で、最後の時を生きていく。

そうした人間の姿であろう。

しかし、この書を読むとき、死を覚悟した人間が、実は、一つの不思議な光景を見ることを、教えられる。

井村和清医師。三〇歳のある日、突如、右膝に巣食った悪性腫瘍が診断される。直ちに転移を防ぐために右足を切断するが、その甲斐なく、腫瘍は両肺に転移。

数ヶ月の命を宣告されながらも、最後まで希望を捨てずに生き、三二歳の若さで他界する。

その井村医師が、死を覚悟し、精一杯に生きた最後の日々、愛する家族に向けて思いを綴った手記が、この書である。

では、死を覚悟した人間が見る光景とは、何か。

腫瘍の転移を知り、死を覚悟して帰途についた日の夕刻、井村医師が見た光景である。

「その夕刻、自分のアパートの駐車場に車をとめながら、私は不思議な光景を見ていました。

世の中が輝いて見えるのです。スーパーに来る買い物客が輝いている。走りまわる子供たちが輝いている。犬が、垂れはじめた稲穂が、雑草が、電柱が、小

石までが美しく輝いて見えるのです。アパートへ戻って見た妻もまた、手を合わせたいほど尊くみえたのでした」

自分の命は、もう長くない。そのことを知ったとき、日常の何気ない光景さえも、光り輝いて見える。

その光景を、私もまた、見た。それは、井村医師がその光景を見た、数年後のことであった。

医者から命の長くないことを伝えられた自分が見たのも、やはり、光り輝く光景であった。

自分の足元が崩れてゆく感覚の中で、目の前にある日常の世界が、奇跡のように尊い世界であることを感じ、すべての物事が光り輝いて見えた。

何かの不思議な配剤により、その命を長らえ、二五年の歳月

を生きてきたいまま、そのときの光景は、心に焼きついている。

いや、いままも、毎日のように、その光り輝く光景を、見る。

なぜなら、この書の中で引用されたショーペンハウエルの言葉のごとく、我々は、誰もが、必ず到来する最期の日を持つ死刑囚。百年にも満たない一瞬の生を駆け抜けていく、儂い存在。

そのことに気がついたとき、誰にとっても、目の前の日常の世界が、かけがえのない光を放ち、輝き始めるのだろうか。

田坂広志

多摩大学教授 ソフィアバンク代表

井村和清

飛鳥へ、
そして
まだ見ぬ子へ

井村和清

飛鳥へ、
そして
まだ見ぬ子へ

井村和清

飛鳥へ、
そして
まだ見ぬ子へ

井村和清

飛鳥へ、
そして
まだ見ぬ子へ



田坂広志
多摩大学教授 ソフィアバンク代表

BOOK